



みどりの風



いじめを考える週間の取組から

校長 安藤 晋哉

毎年、4月・9月は各学校で「いじめを考える週間」として、人を大切にする気持ちを育み、みんなが笑顔で過ごせる、いじめのない学校づくりに取り組む週間を設定しています。道徳や学活などの時間に、いじめについての作文教材や視聴覚教材等をもとにして、いじめについて考え、いじめ防止や人権尊重の意識を再確認しています。

本校では、みんなが笑顔で学校生活を送ってほしいところですが、多くの生徒が生活する中で、残念な言動がないわけではありません。

このようなことから、「いじめは絶対に許さない」「いじめは一件でも多く察知し、解決する」という態度で、これからも取り組んでいきます。

今回は、皆さんに紹介したい「小さな物語」があります。



昔、あるところに、かんしゃく持ちの小さな女の子がいました。そのお母さんが、ある日、釘がいっぱい入った袋を渡して言いました。

「いいこと。あなたがかんしゃくを起こしたときは、いつも裏庭の垣根の壁に釘を打ち込むのよ。」「分かった。ママ。かんしゃくを起こしたら、そうするわ。」ところが、最初の日は、なんと37本の釘を打ち込んでしまいました。

それから、数週間、その女の子は段々、自分の怒りをコントロールできるようになり、垣根の壁に打ち込む釘の数は、毎日少しずつ減っていきました。そして、垣根の壁に釘を打ち込むより、自分の怒りを抑える方が楽になってとうとう、かんしゃくを起こさなくて済む日がやってきたのです。女の子はお母さんに、誇らしげに言いました。

「ママ、もう大丈夫よ。かんしゃくを起こさなくて済むようになったわ。」すると、お母さんは、「それはよかったわね。すてきよ。じゃあ、今度は自分の怒りを抑えることができれば、毎日釘を抜いていってごらんさい。」

それから、何日も何日も日にちが経っていきました。そして、お母さんに「ママ、垣根の壁を見てちょうだい。とうとう釘は一本もなくなったわ。」という日がやってきたのです。お母さんは「とてもよくできたわ。偉いわね。」とほめながら、女の子の手を取って、垣根の壁のところに行きました。

そして、傷だらけの壁を見せて諭したのです。「垣根の壁の穴を見てごらん。壁は、もう元のままじゃないでしょう。これと同じで、あなたが、誰かに怒って言葉をぶつけたら、その子は、この壁と同じような傷を心に受けてしまうのよ。」という話です。

ささいなことに怒りが制御できず、バカにする言葉・差別的な言葉が発せられたことで受ける傷は、身体に受ける傷以上に、とても辛く、何とも言い難い心の痛みを感じるものです。言葉を発した本人は「あまり気にならない、ささいなこと」と思っている、受けた人は、生きる力を失ったり、一生忘れられないものになったりする場合があるのです。

今回、この機会に自分の胸にそっと手を当てて、自らの言動を振り返り、自分がされたくないことを他人にしていないか再度自分に問うてみてください。

自分の身近にいる家族や同級生、先輩・後輩は、貴重な何ものにも代えがたい存在です。お互いの気持ちを理解し、分かちあえる人間としてのつきあいを続けていきたいものです。

第77回体育大会

9月10日に体育大会を実施しました。今年は、たくさんの保護者の方に参加していただき、昼食も生徒と一緒に食べてもらいました。熱中症対策を施しながら、生徒たちの燃えんばかりのエネルギーを感じていただけたと思います。また、体育大会を開催するにあたり、親力部の皆さんやOBの方が駐車場の準備や誘導等ご協力くださいました。感謝いたします。

